大分市の高校生の可能表現について
～大分県立西高等学校におけるアンケート調査（平成18年6月実施）結果報告～

別府大学文学部国文学科
准教授　松田　美香

I 調査の経緯

報告者は平成12（2000）年からこれまで、大分方言の可能表現に興味を持って調査・研究に取り組んできた。形式の多彩さとその使い分けの複雑さは過去にも報告してきたが、大分方言の可能表現については研究が不足していると言わざるをえない。

さて、大分県立西高等学校（以降は西高と呼ぶ）の「大分学」で昨年6月に講義をする機会をいただいた。その際、事前に受講生徒に可能表現のアンケートを渡しておき、講義当日に回答して持って来てくれるようお願いした。

調査票はこれまでに報告した平成16年度秋の調査で使用したもの[1]とねらいは同じであるが、質問の文章を今までのものより詳細にして、これまでの懸案であった「被調査者それぞれの例文のとり方の違い[2]」が起きないように工夫した。今回は、調査したうちの大分市内で生まれ育った被調査者のものだけに絞って報告する。その他の地域の分については、いずれ稿を改めて述べたいと思う。

II 調査票の改訂

以前の調査票と今回のものを比べてみる。

「外的条件可能（動作主を取り巻く外的な状況等による可能）」の質問文では、

（旧）**時間がなくて行くことができない**

に対し、

（新）最近はさまざまな映画が上映されていますね。どうしても見たい映画があります。友達はもう見たと言っています。でも、部活などがあって見に行く時間がありません。あなたがその友達に次のように言うときです。　**時間がなくて行くことができない**

と改変した。いずれもすぐ下欄に、下線部分の言い方として、イキキラン、イケン、イケレン、イカレン、イクコトガデキン、イキウセン、イキコナサン、イキダサン、「その他」のうち、どれかに丸を付けてもらったり書き込んだりしてもらうようにしている。

また、「心情可能（動作主の内部である心情による可能）」の質問文では、

（旧）**夜のお墓なんてこわくて一人で行くことができない**

に対し、

（新）「肝だめし」という行事・遊びがあります。夜のお墓などに、1人あるいは数名で行き、度胸や勇気があるかどうかを試すわけです。あなたがそういうこわい思いをするのが耐えられない性格だとして、次のように友達や家族に言うときです。

夜のお墓なんてこわくて一人で行くことができない

と改変した。

上の例の新旧を比べるとわかる通り、旧調査票は可能表現が使われる1つの文によって可能の形式を選ばせるのに対して、新調査票ではその質問文を出す前に2～3文前後の詳しい状況を書き添えた。このことによって、被調査者が選び取る可能表現形式が「外的条件可能」や「心情可能」などにより絞られるようにしたわけである。旧調査票では、被調査者がどのような読み取りによる可能表現形式の選択を行ったのかが不明瞭であった。つまり、調査者が立てた仮説とは違う結果が出ることが余りにも多く、それは質問文に被調査者の

[1] 九州方言研究会編（2004）『西日本方言の可能表現に関する調査報告書』から抜粋したもの。
[2] 日高貢一郎（1983）「大分県国東半島の可能表現」（『国東半島―自然・社会・教育―』大分大学教育学部　583ページ）

自由な「読み込み（＝例文のとり方）」ができる余地があるからだと結論付けられていた。そうだとすれば、そのような「読み込み」を許さない質問文による調査を一度は試みるべきである。

このような理由により、調査票を改訂することになった。もとになっている質問文は、九州方言研究会編（2004）からの抜粋26問であるが、付け足した文はすべて報告者が作成したものである。

Ⅲ 調査情報と結果

1）調査日　平成18年6月19～27日に各自で記入してもらい、26～27日に回収した。

2）被調査者　大分市生まれ・育ちの高校生　24名（女子19名、男子１名、不明4名）

3）調査項目数　26問

4）採取された可能表現形式　（「読む」「起きる」で代表させる。肯定形／否定形。カタカナは方言形。）

①読みキル／キラン、起きキル／キラン　②読める／読めン、―――／―――　③読めレル／レン、起きレル／レン　④読まレル／レン、起きラレル／ラレン　、⑤読むコトガデキル／コトガデキン、起きるコトガデキル／コトガデキン　⑥読みダス／ダサン、起きダス／ダサン　⑦読みコナス／読みコナサン、起きコナス／起きコナサン、⑧読みウス／読みウセン（ヨセン）、起きウス／起きウセン以上の８種。なお、③は可能動詞とラレル形の混合として「二重可能形[3]」と呼ぶ。

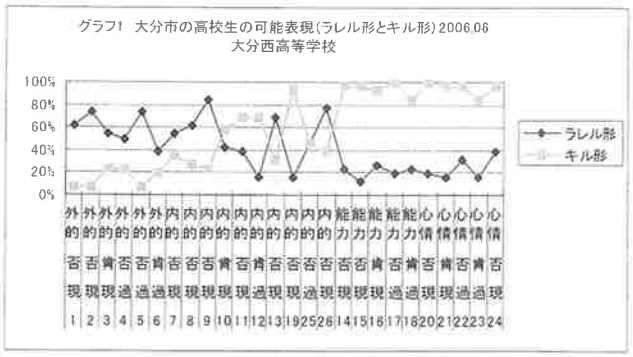
5）調査の結果（グラフ１、２）

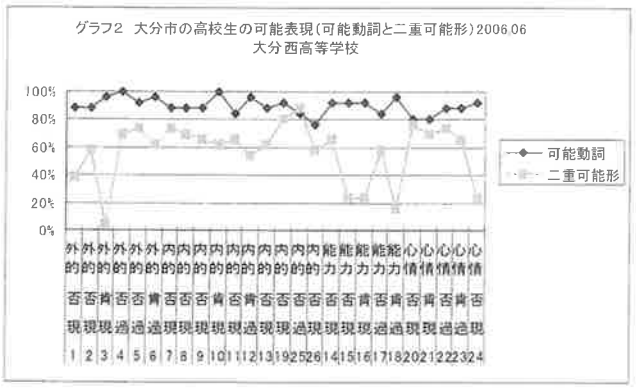
グラフの見方について、以下に説明する。

まず、可能の意味を「ある動作ができる／できない」だけでなく、その根拠（どのような理由・条件によってできる／できないのか）によって下位区分している。それが横軸の「外的」「内的」「能力」「心情」と表示されているもので、ある動作ができる／できないは動作主の外による（「外的」な条件）のか、動作主の「能力」なのか、動作主の「心情」なのか、それとも、動作主の内部の一時的なものによる（「内的」な条件）のかで名付けられている。

「内的」は、「動作主の内部であるが、体調や気分などの一時的な原因による可能／不可能」である。この区分は渋谷勝己（1993）[4]の提唱によって知られている。

さらに下は肯定形か否定形か、さらにその下は時制で現在・過去のいずれか、一番下の番号は質問の通し番号である。グラフ１は１～26番の質問項目にどのような形式を答えたかを表している。調査は前もって書いてあるカタカナ表記の形式（前掲のイキキラン、イカレンなど）に○を付けてもらうようにした。なお、複数回答も可とし、それらを含めてそれぞれの形式にどれだけ使用回答があったかを示した（グラフ１、２）。





[3] この形は可能動詞（五段活用動詞のみ）の語幹にレル／レンを付けたものと考えれば、可能動詞＋可能の助動詞という「二重の可能形」形を施しているので「二重可能形」と呼ぶにふさわしい。可能動詞の中にレを挟みこんだ形と捉えて「レ足すことば」と呼ぶ人もいる。レルは「受身」の助動詞でもあり、それとの区別のために生じたとされる「ラ抜き形」（一段活用動詞のみ）と対に考えて「レ足すことば」と命名されたのであろう。しかし報告者は、方言使用者の意識を汲み取ってつけた「二重可能形」の方が優秀な命名と考えている。初出は管見の限りでは村上和也（2004）「大分方言における可能表現の一考察」（同志社大学文学部文化学科卒業論文）である。

[4] 渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」（『大阪大学文学部紀要』第33巻第１分冊）

Ⅳ 二重可能形の役割の変化

グラフ1を見ると、「能力」と「心情」はキル形、「外的」から「内的」にかけてはラレル形が担当しているといってよい分布をしている。しかし「内的」の部分は複雑である。

表1　「内的な条件」の中で、ラレル形の使用率が高かった質問文

13	今度は友達の太郎のことです。太郎も泳ぐのが得意です。でも、太郎は最近、比較的大きなケガをしてしまいました。現在、足に包帯をしています。あなたが友達や家族に次のように言う時です。 太郎は足をケガしていて泳ぐことができない
26	あなたは泳ぐのが得意でも不得意でもありません。最近、あなたは小さなケガをしてしまいました。水着で隠れる部分で、包帯などもしていません。でも、水着で傷が擦れると悪化しそうなので、今日は泳がないほうがいいと思っています。あなたが友達に次のように言う時です。 私はケガしていて泳ぐことができない

表2　「内的な条件」の中で、キル形の使用率が高かった質問文

11	あなたは泳ぐのが得意で、毎日でも泳ぎたいくらいです。でも最近、あなたはケガをしてしまいました。包帯などはしていないので、水に入って泳ごうとしてみましたが、やはりうまくできません。あなたが友達や家族に次のように言う時です。 やっぱり泳ぐことができない
12	あなたは泳ぐのが得意で、毎日でも泳ぎたいくらいです。昨日は特に体調が良いと感じました。それで、1キロ泳ぐことができたことを友達や家族に次のように言う時です。 きのうは体調がよくて1キロ泳ぐことができた
19	あなたは先ほどスポーツ飲料を十分だと思うまで飲みました。ところが、また差し入れにスポーツ飲料をもらって、今飲むように強く勧められました。あなたが友達に次のように言う時です。 もうこれ以上飲むことができない（友達にこっそり言う場合です）

表3　「内的な条件」の中で、ラレル形とキル形が同じくらいの使用率だった質問文

25	きのうはとても体がだるく、お腹や頭も少し痛みました。風邪ではなかったようですが、授業を受けるのは難しいと思い、学校を休みました。違う学校の友達に、電話などで言う時です。 きのうは体調が悪くて学校に行くことができなかった

このように比較してみると、ラレル形は客観的（この場合は目で確認できる）な要素が決め手になっていることがわかる。他方、その要素がない場合にはキル形が高くなっている。表3（25）は、頭痛や腹痛という外から確認するのが難しい要素であるために、ラレル形とキル形が拮抗する結果となったと考えられる。

さて、グラフ2では、可能動詞が意味の下位区分に関係なく全体的によく使用されることがわかる。そして二重可能形は全体的に高い使用率だが、ところどころで極端に低くなっている。先行研究では「二重可能形は内的な条件の可能を担当する」とされているが、今回の結果は（「内的」は他よりやや高い使用率だが）、それ以外でも二重可能形が使われていることを表している。二重可能形の「内的」を見ると、3が低く、19と25が非常に高い。3は二重可能形にすると「コレレン（来れれん）」となり、「レレ」の連続になる。15、16、18も「モグレレル（潜れれる）／モグレレン（潜れれん）」となり、24も「ワタレレン（渡れれん）」となる。このように「レレ」の連続になる場合は、すべて二重可能形の使用率が低くなっている。以上の結果から、「レレ」の連続を嫌ってこのような結果になったと考えられる。二重可能形が19と25では高い使用率であるものの、他にも高い使用率があり、特定の意味範囲を担当しているとは言

いがたい。

今回の結果からは、二重可能形が音の制約（「レレル」にならない形が好まれる）を受けながらも、可能表現全般に使われることが明確になった。日高（1991）では「可能表現の3区分」と呼びうる程度[5]であったのが、大分市の高校生の結果は、二重可能形の意味が「主観状況可能（内的な条件可能にほぼ相当する）」の枠から出て、可能表現全体を覆うようになってきたことを表している。

なぜ、二重可能形が「内的な条件」の担当から可能表現全般を表せるようになったのであろうか。可能表現に用いられる動詞は、何らかの意志性が認められなければならない。そして、主体が意志を持って動作する場合、その成立・不成立の鍵（本論で可能の原因・根拠と呼んでいる）は何処にあるかということが問題となるであろう。それが動作主の身体内か身体外かということで分ける2区分は、大変わかりやすく納得できるものだと思われ、共通語にこそ無いものの、日本の各地で行われているのである。さらに大分県のかなり広い地域では、3区分があると報告されてきた[6]。第3番目の区分とは「身体内でありながら、その性質は身体外と似て、一時的な可能不可能の要素を持つ」部分に当てられた。それは「体調や気分」などである。しかし、その意味枠では完全にキル形やラレル形を排除できなかったものと考えられる。

表4　各形式の比較（「行く（五段活用動詞）・食べる（一段活用動詞）」で代表させる）

形式	肯定形	否定形
キル形	イキキル・タベキル	イキキラン・タベキラン
ラレル形	イカレル・タベ（ラ）レル	イカレン・タベ（ラ）レン
可能動詞	イケル・[タベレル]	イケン・[タベレン]
二重可能形	イケレル・タベ（レ）レル	イケレン・タベ（レ）レン

表4の一段活用動詞（食べる）のように、[　]の形は無いはずであるが、ラ抜きあるいはレ抜きによる[タベレル／タベレン]が実際に存在する。このような状況の中であれば、方言話者はタベレレルはタベラレルともタベレルとも関係が深い形と思い、それらと同種（元は同じ）だという結論を下すのが自然である。こうして、二重可能形はラレル形や可能動詞の意味の領域まで進出することが出来たのである。同様のことが五段活用動詞（イケレルなど）へも類推によって広まっていったと考えれば、現在の可能表現全般への分布状況の説明がつきそうである。

その他の形式もわずかながら回答された。～ウスは2人、～ダスと～コナスは3人の使用者がいたが、意味の特定はできなかった。～コトガデキルは、9人が全質問に使用すると答えている。

Ⅴ まとめ

今回の、大分市で生育した高校生の調査結果を以下にまとめる。

①ラレル形とキル形とで、意味の分担がある。それは「外的な条件による可能」：「能力・心情による可能」である。しかし、この２形式は互いを排除するものではない。質問文をどちらの意味で読み込むかの違いによるものであり、形式の意味が錯綜しているわけではない。

②大分市出身の高校生の「内的な条件による可能」は、ラレル形とキル形が使われている。その使い分けの決め手は「客観的に認識できる」：「できない」である。

③可能動詞は可能の意味全般に使われている。二重可能形も「レレ」が連続する場合には避ける傾向にあるが、可能の意味全般に使われている。2つの形式は、現在のところ併存している。

今回の調査の結果は、キル形や可能動詞の結果に100%に極めて近い使用率を出すなど、より鮮明に大分市方言の可能表現の使用状況を捉えることができた。今後も大分方言の実態を映し出すような、より良い調査票作りを目指したい。

[5] 日高貢一郎（1991）「可能表現」（『大分県史方言篇』大分県）でも、「人により、また場合によって表現に若干の幅があり得ることに注意しておきたい。」（269p.）とある。

[6] 拙稿（2001）「地域から発する可能表現の３区分化～大分県方言の可能表現についての一考察～」（『地域社会研究』第４号学校法人別府大学地域社会研究センター）などを参照されたい。